

京都市中京区
長屋博久さん・「服育」で子どもたちと向き合う人

衣服を通して環境保全や社会性を子どもたちに考えてもらいたい



学生服の意味を探究して出会った「服育」

昔から、ものづくり、そして服に興味があり、大手繊維メーカーに11年間勤めました。その後、学生服専門店である家業に就き、学生服に携わって6年。昨今、制服は着崩しをしたり、好きな風に着る、という風潮にあります。しかし、学生服というのは学校のシンボルであり、子どもが学ぶ場である大切なもの。単なる衣服ではありません。私は「学生服」教材と考え、子どもたちに着る意義をしっかりと知って着てほしいと思っています。

学生服本来の目的をしっかりと伝えていこうと追求していきながら、出会ったのが「服育」でした。「服育」というのはただ正しい着こなしを教えるだけではなく、社会性や環境保全など、様々なことを衣服を通じて伝えていくこと。私は、

この「服育」を仕事にしていきたいと思えました。そして、サラリーマン時代より長年携わってきた繊維の知識をどこかで生かせないかと思っていたので、繊維を通じた環境学習に取り組みはじめたのです。長く着て、リサイクル衣服を通じた環境保全へ

日本人一人あたりが捨てる服のゴミは年間どれくらいか知っていますか？答えは約10kgです。スーツの上下だけで約1kg、Tシャツ1枚で約100gなので、相当な量ですよ。では捨てたあととはどうなるのでしょうか？じつはウエス（ポロ布）への転用も含めてリサイクルされているのはたった1割未満、9割以上は最終的に燃やしているのが現状です。ではどうしたらいいのか。まず服をできるだけ長く着て、捨てるのが大切です。これ



京都らしさがたくさんつまったエゴ学生服だよ！



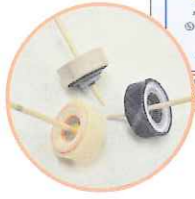
ウールフェルトストラップづくり。「ウールが、なぜあたたかいのか？」という話からはじめてくれる



京こまのワークショップ。いらなくなったハギレを長細く切り、それを棒にまきつけてコマをつくる



色とりどりの「京こま」が出来上がる



「その服、もう捨てちゃうの？」長屋さんと京都工芸繊維大学、京都精華大学が協力してつくったマンガ

をまず知ってもらいたいですね。繊維リサイクルは用途開発が大変でうまく循環していません。その解決法を考えた結果、リサイクル用途の開発、回収するシステム、消費者意識の向上の三つが必要だと思っただけです。それをバランスよく進めないと、衣服による循環型社会はうまくいきません。三つ目の消費者意識を改善することは、大手企業がなかなか取り組めないことだと思います。ここを啓発していこうと考え、様々なワークショップを開いています。たとえば、いらなくなった服のハギレを使った「京こま」づくり。昔は、着られなくなった着物の生地でも、お手玉などのおもちゃをつくっていましたが、「京こま」もその一つで、今も伝統産業として伝えられています。昔から服を捨ててゴミにするのではなく、工夫して遊び道具にリサイクルしていったんですね。あとはウールの「フェルト化」する性質を利用して「ウールフェルトストラップ」づくりや、古着を原料として、紙すきを行ってハガキをつくるワークショップなど。子どもたちははくもくと取り組んでくれます。

環境学習は理論だけではなく、見たり触ったりすることがとても大切だと思います。ものをつくって遊ぶ楽しさをプラスして環境保全を伝えていくことで、いらなくなった服の現状や活用方法を考え

るきっかけとなり、消費者の意識を変えていけると思っています。

京都から発信！環境にやさしい学生服

今、仕立て直しと繊維リサイクルができる京都流エゴ学生服の事業化を目指して開発を進めています。特に中学生は成長期なので、普通に買うともう一着必要になってしまいます。ですから最初に少し大きなサイズを着て、あとから「仕立て直し」をしてもらいます。

仕立て直しとは、お直しのことです。「仕立て直し」をして長く着るといふ和服の考え方、つまり京の和の文化を制服という洋の文化に取り入れていくという意味を含んでいます。あえて「仕立て直し」と表現しています。そうして、長く着ることができて最終的にはリサイクル

ができる制服を目指しています。さらにそこに地域資源をプラス

しました。たとえば西陣織のネクタイとか。京都は地域力が残っている町です。これまでしっかりと守られてきた伝統を、きっちり受け継いでいかないとはいけません。また京都は観光都市でもあるので、子どもたちにはもてなしの心を持って、制服を着こなしてほしいですね。

私は子どもたちに影響のある大人になりたいと思っています。子どもたちに、自分一人で生きているのではなく地域の中で育っていることを感じ、自分が何ができるかを考えてほしいです。私は学生服屋なので「服育」で、それを伝えていけたらと思っています。一人ひとりが意識してまわをつくらなければ京都はもっと素敵な町になりますよね。



服からいろんなものができるね



Tシャツからつくったハガキ



ウールフェルトでつくったストラップ

有限会社村田堂

創業1889(明治22)年。京都の学生服専門店の老舗。2009年11月20、21日、京都文化博物館で「京都の教育と学生服のあゆみ展」と題して村田堂120周年記念イベントを開催。日本で初めて採用されたセーラー服や、戦時中の陶器のボタンなど、制服から見る歴史が並べられた。



●問い合わせ ☎075-231-1593
京都市中京区高倉通二条上る天守町744
<http://www.muratado.co.jp/>



長屋博久(ながや・ひろひさ)さんプロフィール

1970年生まれ。同志社大学卒業後、日本毛織株式会社に入社。業務用、家庭用カーベットの商品開発や営業を11年間担当し、ウールをはじめとする天然繊維や合成繊維、また繊維リサイクルについて多くのことを学ぶ。その後家業である村田堂に勤務。「服育」の推進に努め、繊維を通じた環境学習に力を入れる。また環境活動に熱心な複数の企業と「出前授業」も行っている。